

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	Associations of personality traits with the capacity performance discrepancy of functional outcome in patients with schizophrenia
別タイトル	統合失調症を有する患者の社会機能における「能力」と「実行」の乖離に關与する性格特性について
作成者（著者）	内野, 敬
公開者	東邦大学
発行日	2020.03.15
掲載情報	東邦大学大学院医学研究科 博士論文 内容の要旨及び審査結果の要旨.
資料種別	学位論文
内容記述	主査：桂川修一 / タイトル：Associations of personality traits with the capacity performance discrepancy of functional outcome in patients with schizophrenia / 著者：Takashi Uchino, Takahiro Nemoto, Taiju Yamaguchi, Naoyuki Katagiri, Naohisa Tsujino, Yoshitaka Murakami, Kuniaki Tanaka, Masafumi Mizuno / 掲載誌：Neuropsychiatric Disease and Treatment / 巻号・発行年等：15:2869 2877, 2019
著者版フラグ	none
報告番号	32661甲第938号
学位記番号	甲第643号
学位授与年月日	2020.03.15
学位授与機関	東邦大学
メタデータのURL	https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD52388162

博士學位論文

論文内容の要旨

および

論文審査の結果の要旨

東邦大学

内野 敬より学位申請のため提出した論文の要旨

学位番号甲第 643 号

学位申請者 : うち の たかし
内 野 敬

学位論文 : Associations of personality traits with the capacity-performance discrepancy of functional outcome in patients with schizophrenia

(統合失調症を有する患者の社会機能における「能力」と「実行」の乖離に關与する性格特性について)

著 者 : Takashi Uchino, Takahiro Nemoto, Taiju Yamaguchi, Naoyuki Katagiri, Naohisa Tsujino, Yoshitaka Murakami, Kuniaki Tanaka, Masafumi Mizuno

公表誌 : Neuropsychiatric Disease and Treatment 15 : 2869-2877, 2019

論文内容の要旨 :

【目的】統合失調症を有する患者においてリハビリを達成するためには、精神症状の改善だけでなく、実生活における社会機能の改善が欠かせない。しかし、依然として、就労や単身生活といった社会参加・復帰は十分には達成されておらず、統合失調症を有する患者の生活における障害の程度は、身体疾患を含めた全疾患の中でも高度である。これまで、社会機能障害を予測する因子として認知機能障害が繰り返し報告されてきた。しかし、認知機能リハビリテーションが社会機能に及ぼす影響は十分とは言えなかった。そのなかで、実生活における行動の程度を示す指標である社会機能の「実行 (Functional Performance)」と認知機能の間の介在因子として、金銭管理や電話対応の技能といった社会機能における「能力 (Functional Capacity)」が注目されている。精神科リハビリテーションの一部として、社会機能における「能力」を高めることに焦点を当てた作業療法や生活技能訓練などのアプローチが試行されてきた。しかし臨床場面においては、必ずしも社会機能における「能力」と「実行」は相関しない。実生活を送るうえで必要であるとされる一定の「能力」を有しているにも関わらず、実際の行動には反映されず社会機能の「実行」は不良である (高・能力/低・実行) 症例やその逆、すなわち「能力」が低いにも関わらず「実行」できている症例 (低・能力/高・実行) を経験する。先行研究では、性格特性は人間の行動や社会生活に強く反映される指標とされ、職業能力、社会的サポートの受けやすさなど生活場面における変数との関連が多く報告がなされている。本研究では、社会機能

における「能力」と「実行」に乖離を認める統合失調症を有する患者の性格特性について検討した。

【方法】 東邦大学医療センター大森病院および医療法人財団厚生協会東京足立病院に外来通院中の統合失調症を有する患者（年齢16歳～60歳）を対象とした。社会機能における「能力」はUPSA-B（UCSD Performance-based Skills Assessment-Brief）を用いて評価し、社会機能における「実行」はSFS（Social Functioning Scale）を用いて評価した。その他、各群の基本属性、精神症状（PANSS: Positive and Negative Syndrome Scale）、性格特性（TCI-R: Temperament and Character Inventory- Revised）を評価した。UPSA-BおよびSFSの中央値により、対象者を4群（高・能力/高・実行群、高・能力/低・実行群、低・能力/高・実行群、低・能力/低・実行群）に分けた。4群について一元配置分散分析を用いて比較し、有意な差が認められた場合に事後分析を行った。なお、事後分析は、高・能力/高・実行群 対 高・能力/低・実行群、および低・能力/高・実行群 対 低・能力/低・実行群について行った。本研究は東邦大学医学部倫理委員会の承認を得て行われた（研究課題番号A17007）。

【結果】 計94例（男性53例・女性41例、平均41.1歳、平均教育年数13.5年、平均発症年齢26.0歳、平均罹病期間15.1年、平均クロロプロマジン換算抗精神病薬投与量475.3mg/日）について解析を行った。UPSA-BおよびSFSの中央値は、それぞれ73と113であった。これらの中央値により分けられた4群は、高・能力/高・実行群26例、高・能力/低・実行群27例、低・能力/高・実行群22例、低・能力/低・実行群19例であった。4群の基本属性に有意な差は認めなかった。性格特性に関して、低・能力/高・実行群は、低・能力/低・実行群に比して、損害回避傾向が有意に低かった。また、高・能力/低・実行群は、高・能力/高・実行群に比して、固執傾向が有意に低かった。

【考察】 統合失調症を有する患者において、低い損害回避傾向が反映する楽観的・過信的な性格特性は、社会機能における「実行」を促進させる可能性が示唆された。また、低い固執傾向が反映する躊躇いやすく飽きやすい性格特性は、社会機能における「実行」を制限する可能性が示唆された。性格特性と社会機能の間にある交絡因子やその因果関係についてはさらなる検討を要する。今後は、縦断的な追跡による因果関係および交絡因子の評価を行う。また、損害回避傾向や固執傾向を考慮に入れた心理社会的介入が社会機能に与える効果を検証する。

1. 学位審査の要旨および担当者

学位番号甲第 643 号	氏 名	内 野 敬
学位審査担当者	主 査	桂 川 修 一
	副 査	端 詰 勝 敬
	副 査	西 脇 祐 司
	副 査	狩 野 修
	副 査	長 谷 川 友 紀
<p>学位論文の審査結果の要旨：</p> <p>統合失調症を有する患者の社会機能障害に関連する因子として、認知機能障害、陽性症状、陰性症状などさまざまな臨床指標が検討されてきた。実生活における行動を示す社会機能の「実行」に寄与する因子として、社会機能の「能力」が注目されている。臨床現場において、この「能力」と「実行」は相関せず、一定の能力を有しているにもかかわらず、実際の行動には反映されない。高能力だが、低実行症例や、その逆の低能力であっても高実行の症例を経験する。一方、性格特性は人間の行動や社会生活に強く反映される指標とされており、多くの先行研究がある。性格特性は遺伝によって規定される気質と環境によって規定される性格から構成されており、その評価尺度である Temperament and Character Inventory (TCI) は 7 つの因子で構成されている。今回申請者らは性格特性に着目して、社会機能における「能力」と「実行」の乖離を認める統合失調症を有する患者について調査を行い検討した。</p> <p>調査対象は医療機関 2 施設に外来通院中の統合失調症を有する患者 94 例であり、調査方法は UCSD Performance-based Skills Assessment- Brief (UPSA-B) を用いて能力、Social Functioning Scale (SFS) を用いて実行といった社会機能を評価した。それぞれ中央値を用いて高能力/高実行群 (HH 群)、高能力/低実行群 (HL 群)、低能力/高実行群 (LH 群)、低能力/低実行群 (LL 群) の 4 群に分類し、各群の基本属性、Positive and Negative Syndrome Scale (PANSS) による精神症状、TCI- Revised (TCI-R) による性格特性について評価し、比較検討を行なった。</p> <p>結果では 4 群の基本属性に有意差はなかった。性格特性に関して、LH 群は、LL 群に比べ、損害回避傾向が有意に低かった。また、HL 群は、HH 群に比べ固執傾向が有意に低かった。低い損害回避傾向が反映する楽天的・過信的な性格特性は、社会機能における「能力」にかかわらず、「実行」を促進させる可能性が示唆された。また、低い固執傾向が反映する躊躇や飽きやすい性格特性は、社会機能における「実行」を制限する可能性が示唆された。因果関係と交絡に関しては縦断的な追跡による評価が必要だが、抽出された性格特性を考慮に入れた心理社会的介入がリカバリー達成に重要であることが示された。</p> <p>学位審査会は 2019 年 12 月 24 日、西脇、狩野、桂川の 3 名の出席と長谷川、端詰 2 名の書面審査により開催された。はじめに内野氏が統合失調症を有する患者の、臨床的・リカバリーを達成するには実生活における社会機能の改善が必須であることを説明し、社会機能に寄与する因子について解説した。続いて本研究の目的を解説し、社会機能の評価尺度とそれらを用いた解析手法を示して、注目すべき性格特性を抽出し、その意味するところを説明した。審査委員からは、性格特性は病期によって変化するものか、「能力」と「実行」との乖離は時間的経過とともに変化するのか、男女差に関して、中間値を用いて 4 群に分割した妥当性について、UPSA-B と SFS は症状の程度や重症度の影響を受けないか、実行機能とは何を意味するか、神経認知は向精神薬の量と関連するか、統合失調症の病型による違いに関して、今後の縦断的研究によって得られる知見は何か、発症前の状態でも同様な結果が得られるかといった様々な質問がなされたが、内野氏はすべての質問に丁寧に回答した。質疑応答の中で、内野氏が統合失調症の性格特性に関して深い知識を有することが確認できた。本研究は統合失調症のリカバリーのために性格特性がその予後を占う因子となる可能性を示した新規性のある有意義な研究であり、学位授与に値するものと審査委員全員が判断した。</p>		